

コウノトリ育む農法アンケートの結果をお知らせします

コウノトリ育む農法の取組み開始から10年以上が経過しました。同農法に対する認知度や感想、また、同農法に取り組んでいない理由や課題等を抽出し、今後の育む農法の普及拡大につなげるため、「コウノトリ育む農法アンケート調査」を実施しました。その結果がまとまりましたので、お知らせします。

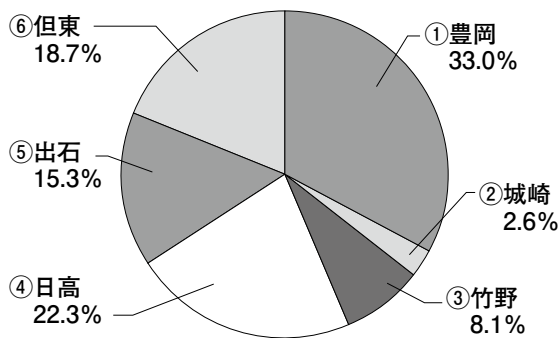
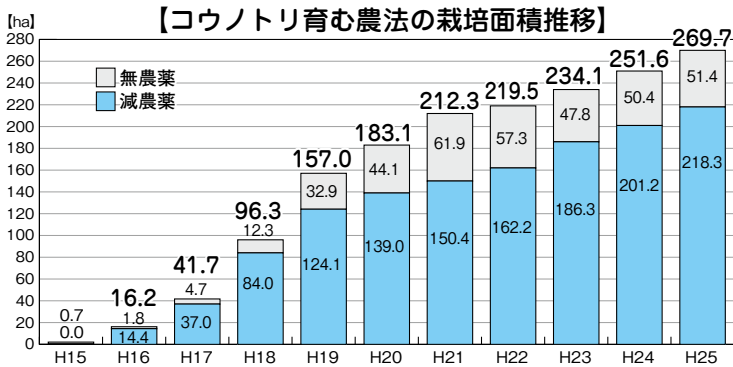
《問合せ》農林水産課環境農業推進係 ☎ 23-11111

「コウノトリ育む農法」とは？

安全・安心なお米と、たくさんのお米を同時に育む農法です。

安全・安心なお米は、無農薬（農薬を一切使用しない）、または、農薬の使用を慣行基準から75パーセント以上削減し、化学肥料は一切使わず、有機質肥料のみで栽培します。

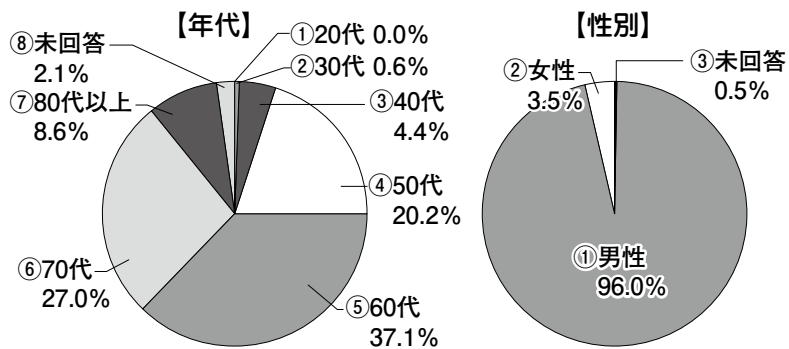
コウノトリの餌となるカエルやドジョウなど、たくさんのお米を育むため、早期湛水・冬期湛水や深水管理、中干し延期など、1年を通して生きものが生息しやすい環境づくりのため、水管理を大切にしています。



問1 居住地

- アンケート実施概要
- ▽ 実施期間 平成25年6月7月
 - ▽ 対象 水稲栽培農家（30人）
アール以上の耕作者 2384人
 - ▽ 回答者数 1253人
 - ▽ 回答率 52.6パーセント

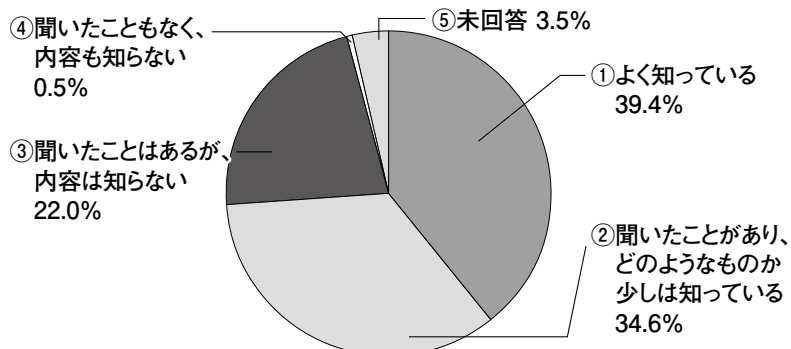
問2 性別・年代



水稲栽培農家を年代別に見ると、60代以上の生産者が全体の72.7パーセントを占め、農家の高齢化が進んでいます。

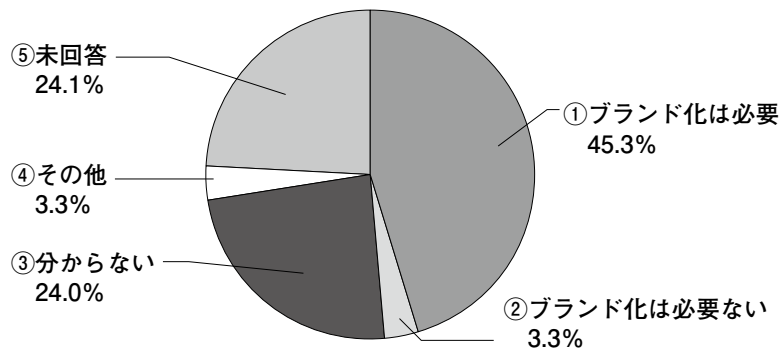


問3 「コウノトリ育む農法」の認知度



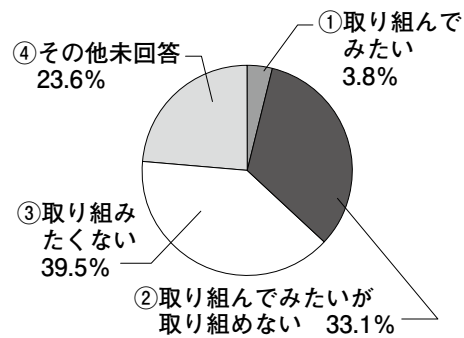
コウノトリ育む農法を、「よく知っている」「または聞いたことがあり、どのようなものか少しは知っている」と回答した方が全体の74.0パーセントを占め、一定の認知を得ていることが分かりました。

問4 コウノトリ育むお米のブランド化



TPPへの交渉参加を表明した現状を踏まえ、コウノトリ育むお米のブランド化について調査した結果、約半数の方が「ブランド化は必要」と回答しており、引き続きブランド化を推進する必要があります。

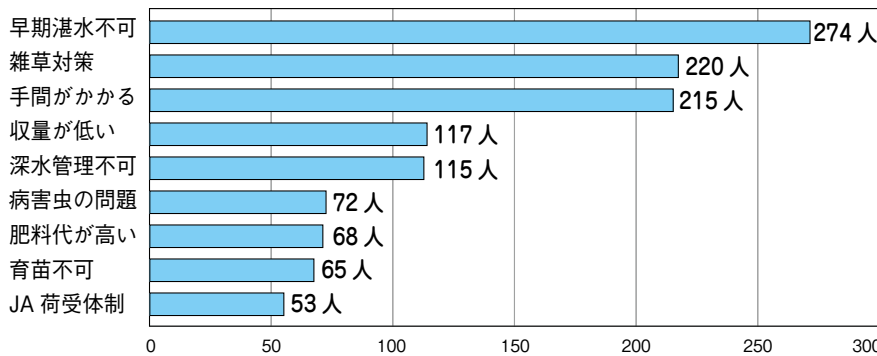
問5 コウノトリ育む農法の取組意向



コウノトリ育む農法への取組意向については、「取り組んでみたい」と回答した方が全体の3・8パーセント、「取り組んでみたいが取り組めない」と回答された方が33・1パーセントとなり、およそ3人に1人の方が「取り組むたい」意思があることが分かりました。

また、39・5パーセントの方が「取り組むたくない」と回答しています。主な理由には、「高齢」「手間を掛けたくない」「兼業農家のため」「農地が少ない（零細）」などが挙げられています。

問6 コウノトリ育む農法への取組みの阻害要因



「取り組んでみたいが取り組めない」と回答された方の阻害要因となっているものは、次のとおりです。

※複数回答可の設問のため、合計数値は415人と一致しません。

「早期湛水」とは？

田植えの1カ月前から田んぼに水を張り、コウノトリのエサとなるたくさんの生きものを育む水管理のこと。

「取り組んでみたいが取り組めない」と回答した415人の取組めない理由として、一番多かったのが「早期湛水ができない(22・8パーセント)」、次に「雑草対策(18・4パーセント)」、「手間がかかる(17・9パーセント)」となっています。

この3項目が全体の約6割を占め、水管理や農業の省力化の難しさが伺えます。

コウノトリ育む農法拡大のための課題と対策

○課題

- 1 早期湛水・冬期湛水等で隣接する田んぼに水が浸み出すこともあるなど、近隣圃場に迷惑が掛かることもあり、個人の意思では取り組めない農家が多い。
- 2 抑草対策などに手間が掛かるという理由で取組まない農家が多い。

○対策

- 1 点(個人)ではなく、面(集落)での取組みを推進する。
- 2 雑草対策などの省力化を図る技術の導入を検討する。
- 3 水利権の関係から、冬期や早期の取水が困難な地域について、近隣河川からの取水等を検討する。
- 4 小規模な出荷量でも、たじま農協のカントリーで受け入れできるよう調整を進める。

